

表2 高卒者の価値観〔平均値〕の変化と差異（t 値）

変化	高3時-高卒後				
	全体	就職者	進学者	男子	女子
仕事で成功	2.058*	3.627**	6.13	0.391	2.503*
お金持ちになる	0.625	-0.536	0.904	0.824	0.094
仕事で尊敬	1.190	1.382	0.740	0.085	1.662
よい教育をうける	-1.804	0.287	-2.119*	-1.560	-1.000
子どもをもつ	-0.126	-0.142	-0.070	1.478	-1.763
結婚して幸せな家庭生活	0.399	-0.168	0.506	2.204*	-1.590
親や親せきの近くで暮らす	-0.309	0.778	-0.674	0.272	-0.675
子どもに恵まれた条件	4.727***	3.526**	3.709***	4.938***	1.868
不平等をなくす	2.283*	1.069	2.021*	1.239	2.037*
人の役に立つ	1.235	2.445*	0.335	0.933	0.808
好きなことを楽しむ時間	4.743***	0.772	4.751***	3.541***	3.159**
親友をもつ	2.357*	1.070	2.101*	1.795	1.525
親元を離れて自立	3.729***	1.843	3.259*	4.223***	1.256
N	471	63	408	202	269
差異	就職者↔進学者		男子↔女子		
	高3時	高卒後	高3時	高卒後	
仕事で成功	—	0.75	-3.816***	1.143	2.628**
お金持ちになる	—	0.512	1.223	0.556	0.209
仕事で尊敬	—	0.293	-0.540	0.811	1.768
よい教育をうける	—	-1.427	-3.124**	0.723	1.381
子どもをもつ	—	-0.361	-0.588	0.957	-1.148
結婚して幸せな家庭生活	—	-0.321	-0.087	1.591	-0.915
親や親せきの近くで暮らす	—	0.591	-0.942	-0.906	-1.697
子どもに恵まれた条件	—	2.415*	-0.223	2.615**	-0.674
不平等をなくす	—	0.154	-0.210	0.559	0.781
人の役に立つ	—	1.132	-1.507	-1.559	-2.046*
好きなことを楽しむ時間	—	-0.867	0.615	-1.371	-2.380*
親友をもつ	—	0.494	-0.048	-1.989*	-2.495*
親元を離れて自立	—	-0.128	-0.526	2.094*	-0.907
N		480	472	480	472

(注) \*\*\* p<0.001, \*\* p<0.01, \* p<0.05

### 2.3.1. 就職者と進学者の価値観—進学者の地位達成志向の高まり・自己充足志向の低下

高卒者の高校3年時と高校卒業後1年目における価値項目の平均値を比較し、高校生の価値観が高校卒業後、全体として、また進路別にどのように変化したのかを検討してみよう。なおここでは「進学者」には職についていない非進学者・浪人も含まれ、「就職者」には非正規職員（学生アルバイトを除く）も含まれるものとする。

はじめに「地位達成」型の4つの価値項目に注目してみると、「仕事で成功すること」を重視する回答者が、全体として（平均値 1.47→1.41、t=2.058、p<.05、以下同様）、とりわけ就職者(1.47→1.11、t=3.627、p<.01)の間で著しく減少していることがわかる。その結果、高校3年生の回答にはみられない就職者と進学者の差異が、高卒後1年目には有意(1.11↔1.45、t=-3.816、p<0.001)にあらわれている。「仕事で成功する」ことを重視する就職者が減少した結果、

進学者の重視する傾向が際立つようになったのである。

逆に「よい教育を受けること」を重視する傾向は、高3時から高卒後1年目にかけて、進学者(1.16→1.24,  $t=-2.119$ ,  $p<.05$ )の間で強まっている。その結果、高3時にはみられない就職者と進学者の差異が、高校卒業後1年目(0.98⇔1.24,  $t=-3.124$ ,  $p<.01$ )には確認される。なお「お金持ちになる」と「仕事で人に尊敬される」ことを重視する傾向における差異は、高3時から高卒後1年目の間にも、就職者と進学者の間にもみられない。したがって「地位達成」型の価値観では、「仕事で成功する」ことを重視する傾向が就職者の間で弱まり、「よい教育を受けること」を重視する傾向が進学者の間で強まった結果、全体としては進学者の地位達成志向が強くなっている。

つぎに「家庭重視」型の価値項目では、「子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること」を重視する傾向が、高3時から高卒後1年目までに就職者(1.14→1.06,  $t=3.526$ ,  $p<.01$ )の間でも、進学者(1.21→1.07,  $t=3.709$ ,  $p<.001$ )の間でも有意に低下し、その結果として高3時に存在していた就職者と進学者の差異(1.41⇔1.21,  $t=2.415$ ,  $p<.05$ )は、高卒1年目(1.06⇔1.07,  $t=-0.223$ , NS)には解消されている。

「社会貢献」型の価値項目に注目してみよう。「世のなかの不平等を無くすために社会運動する」ことを重視する傾向は、高3時から高卒後1年目までに進学者(1.03→0.96,  $t=2.021$ ,  $p<.05$ )の間で低下し、就職者と同水準になっている。「人の役に立つこと」を重視する傾向は、高3時から高卒後1年目までに就職者(1.75→1.56,  $t=2.445$ ,  $p<.05$ )の間で低下したものの、進学者と同じ高い水準で維持されている。

最後に「自己充足」型の価値項目では、「好きなことを楽しむ時間をもつこと」や「親友をもつこと」を重視する傾向は、全体として、とりわけ進学者(好きなことを楽しむ時間: 1.84→1.71,  $t=4.751$ ,  $p<.001$ 、親友: 1.88→1.83, 2.101,  $p<.05$ )の間で、高3時から高卒後1年目にかけて有意に低下している。「親元を離れて自立する」ことを重視する傾向も、進学者(1.46→1.34,  $t=3.259$ ,  $p<.05$ )の間で同様に低下している。したがって、日本の高校生が重視する価値のトップ3は、依然として高い水準で支持されているものの、親友と好きなことを楽しむ時間をもつことは進学者の間で、人の役に立つことは就職者の間で、その支持率を有意に低下させている。

### 2.3.2. 男女の価値観—自己充足志向が強い女子・大人になれない男子

高卒者の価値観には、いくつかの顕著な男女別の特徴が存在する。表1と表2より、「仕事で成功すること」を重視する傾向は、高3時から高卒1年目にかけて全体として減少しているが、とりわけ女子(1.44→1.35,  $t=2.503$ ,  $p<.05$ )の間で低下が著しい。その結果、仕事で成功することを重視する傾向は、男子よりも女子(1.49⇔1.35,  $t=2.628$ ,  $p<.01$ )が有意に低い。男女共同参画が謳われているにもかかわらず、労働市場に新規参入したばかりの、あるいはこれから参入しようとしている女子高卒者の職業意欲が低下しているのである。若い女性がどのような勤労意識を抱いており、就職先や進学先のいかなる経験がそのような変化をもたらしたのかを検討する必要がある。

一方、高卒者が重視する価値のトップ3である「親友をもつこと」(1.77⇔1.87, -2.495,  $p<.05$ )、「好きなことを楽しむ時間をもつこと」(1.66⇔1.76, -2.380,  $p<.05$ )、「人の役に立つこと」(1.59⇔1.69, -2.046,  $p<.05$ )を重視する傾向は、女子の間で有意に高い。「好きなこと

を楽しむ時間をもつこと」を重視する傾向は、男子の間でも (1.81→1.66,  $t=3.541$ ,  $p<.001$ )、女子の間でも (1.86→1.76,  $t=3.159$ ,  $p<.01$ ) 低下してきているものの、親友と好きなことを楽しむ時間もち、人の役に立つことを重視する傾向は、男子と比べると仕事での成功を重視しない女子の間でとくに強いことがわかる。

最後に、「結婚して幸せな家庭生活をおくること」(1.60→1.49,  $t=2.204$ ,  $p<.05$ )「子どもに恵まれた条件を与えること」(1.33→1.04,  $t=4.938$ ,  $p<.001$ )「親元を離れて自立すること」(1.52→1.31,  $t=4.223$ ,  $p<.001$ ) といった、いわゆる「大人になる」ことに関わる項目を重視する男子が顕著に減少している点を指摘する必要がある。このことは、依然として厳しい状況にある若年労働市場において、親から独立して結婚し、子育てに取り組むことは、多くの男子高卒者にとって、実現が困難な価値と認識されていることを示唆しているのかもしれない。ただし、そのなかでも「子どもをもつこと」を重視する傾向に有意な男女差はみられず、高3時から大きく変化していない。

### 3. 保護者の価値観

#### 3.1. 高卒者との共通性—①親友・②家庭生活・③人の役に立つ・④好きなことを楽しむ

それでは成人期を迎えようとしている高卒者の価値観は、保護者の価値観とどれほどの共通性をもつのだろうか。図3にもどり、13の価値項目を「とても重要」と回答する高校生、高卒者、および保護者の比率を比較してみよう。

各価値項目について「とても重要」と回答する比率は、全体として高校生>高卒者>保護者の順に低下しており、高卒者の重視する価値項目の選び方が、徐々に保護者に近づいてきていると考えることが出来る。そのなかで「子どもが自立できるようにすること」(79.4%)や「子どもを育てること」(68.5%)を重視する保護者と、「親元を離れて自立すること」(43.9%)や「子どもをもつこと」(45.1%)をあまり重視しない高卒者とのギャップが興味深い。これは、これらの「子育て」に関わる価値項目が、長年子育てに取り組んできた保護者にとって、とくに切実な関心事であることを示唆しているのだろう。ただし性役割分業が未だ支配的な日本において、一般に母親が育児の主たる担い手であることと、保護者調査の回答者の8割が母親であることを考慮すると、回答がサンプル・バイアスを反映している可能性も否定できない。

「子育て」に関わる価値項目を除けば、保護者によって重視されているのは、「親友をもつこと」(77.5%)、「結婚して幸せな家庭生活をおくること」(59.2%)、「人の役に立つこと」(49.7%)、「好きなことを楽しむ時間をもつこと」(46.0%) ことであり、高卒者が重視する価値項目と一致している。他方、「仕事で成功すること」(25.4%)や「仕事で人に尊敬されること」(27.9%)、「お金持ちになること」(5.5%)などの「地位達成」型の価値項目を重視する保護者は、高卒者よりもさらに少なくなっている。保護者の地位達成志向は、高卒者よりもいっそう希薄であるといわなければならない。これらの結果より、高卒者と保護者の価値観は、比較的高い共通性を有しているということが出来る。

#### 3.2. 保護者間の差異

保護者は、子どもを育て、自立させることに加えて、幸せな家庭生活と、親友と好きなことをする時間もち、人の役に立つことを重視しており、高卒者と概ね共通の価値観を有していることは、すでに述べたとおりである。このように、どの価値項目を重視するのかという選択

においては、保護者と高卒者は一致しているものの、「とても重要」と回答する比率や、価値項目のスコア（平均値）においては、「子育て」項目を除くほぼ全ての項目において、保護者の得点は低くなっている。これは、高卒者に比べて保護者が、各価値項目の重要性を吟味して、より慎重に回答していることによると解釈するならば、評価基準が異なる平均値の差の検定にもとづいて、高卒者と保護者の差異を論ずることには限界がある（付表3参照）。したがってここでは、高卒者と保護者の価値項目の平均点の比較は割愛し、保護者間の差異に注目する。

### 3.2.1. 就職者と進学者の保護者—子どもに恵まれた条件を与えたい進学者の保護者

それでは、就職者の保護者と進学者の保護者の価値観にはどのような差異があるのだろうか。表3は、高卒者の保護者の価値項目の平均値とその差の検定結果を、進路別、性別に整理したものである。

表3に示すとおり、就職者の保護者と進学者の保護者の13の価値項目についての平均点は類似しており、唯一有意な差異が確認されるのは、「子どもに自分よりも恵まれた条件を与える」（1.11⇔0.89,  $t=2.424$ ,  $p<.05$ ）の項目においてである。就職者と進学者の保護者の価値観は概ね一致しているが、就職者の保護者ほうが、子どもに恵まれた条件を与えることをより強く望んでいるといえる。

表3 保護者の価値観〔平均値〕の差異（進路別・性別）

	合計	就職者	進学者	t値	男子	女子	t値
仕事で成功	1.14	1.17	1.13	0.354	1.22	1.06	2.878**
お金持ちになる	0.75	0.84	0.74	1.139	0.76	0.75	0.268
仕事で尊敬	1.18	1.18	1.18	0.068	1.24	1.14	1.817
よい教育をうける	1.22	1.18	1.24	-0.916	1.20	1.24	-0.747
子どもを育てる	1.66	1.55	1.67	-1.310	1.66	1.66	-0.120
結婚して幸せな家庭生活	1.55	1.49	1.57	-1.319	1.57	1.53	0.759
親や親せきの近くで暮らす	0.57	0.57	0.56	-0.191	0.48	0.65	-3.014**
子どもに恵まれた条件	0.91	1.11	0.89	2.424*	0.82	0.99	-2.585*
不平等をなくす	0.88	0.92	0.87	0.741	0.86	0.88	-0.500
人の役に立つ	1.48	1.46	1.50	-0.343	1.50	1.47	0.577
好きなことを楽しむ時間	1.42	1.43	1.44	-0.244	1.29	1.52	-4.410***
親友をもつ	1.77	1.77	1.77	0.152	1.69	1.83	-3.329**
子どもが自立できるようにする	1.79	1.66	1.80	-1.860	1.76	1.80	-1.079
N	427	63	364	427	205	251	471

(注) \*\*\*  $p<0.001$ , \*\*  $p<0.01$ , \*  $p<0.05$

### 3.2.2. 男女の保護者—地位達成志向の強い男子保護者・自己充足志向の強い女子保護者

男子の保護者と女子の保護者の価値観の差異に注目してみよう。表3より、女子の保護者は「仕事で成功すること」（1.22⇔1.06,  $t=2.878$ ,  $p<.01$ ）を重視する傾向が有意に低い。ところが、「好きなことを楽しむ時間をもつこと」（1.29⇔1.52,  $t=-4.410$ ,  $p<.001$ ）や「親友をもつこと」（1.69⇔1.83,  $t=-3.329$ ,  $p<.001$ ）をとくに重視し、「親や親戚の近くで暮らすこと」（0.48⇔0.65,  $t=-3.014$ ,  $p<.01$ ）や「子どもに恵まれた条件を与えること」（0.82⇔0.99,  $t=-2.585$ ,  $p<.05$ ）を望んでいるのも、女子の保護者である。

これらの結果は、子どもの性別によって保護者の考え方もある程度規定されることを示唆している。さらに、前項で確認したとおり、女子高卒者も仕事で成功すること重視する傾向が比較的弱く、親友と好きなことを楽しむことを重視する傾向が強いことより、女子高卒者と女子保護者の価値観は、共通性が比較的高いことがわかる。

なお「子どもが自立できるようにすること」は、男子の保護者も女子の保護者もともに望んでいることであるが、仕事で成功することを期待する男子の保護者と、親の手の届く距離で、親友と好きなことを楽しみながら暮らすことを望む女子の保護者にとって、子どもが自立することの意味合いは異なると思われることができる。

#### 4. 「人の役に立つこと」を重視する価値観—保護者の強い影響力

ここまで高卒者の価値観の特徴を、進路別・性別に、保護者の価値観との関わりのなかで検討してきた。進路や性別は、いずれも高卒者の価値観に有意な差異をもたらしていた。また保護者の価値観は、高卒者の価値観と多くの共通性を示していた。ここでは、これらの要因が高卒者の価値観に対してどの程度の規定力をもっているのかを、とくに日本の高卒者に特徴的な価値観である「人の役に立つこと」に注目して検証する。

分析に用いるのは以下の変数である。まず「人の役に立つことをとても重要と回答するか否か」を従属変数とする。この変数は (1,0) の値をとるため、分析には二項ロジスティック回帰モデルを採用する。独立変数には、本稿で検討してきた進路(進学ダミー)、性別(女子ダミー)、保護者の価値観(「人の役に立つことはとても重要」ダミー)に加えて、基礎属性として年間世帯所得(税込み)の4変数を用いる。年間世帯所得は、100万円未満から2000万円以上までのレンジをとる15のカテゴリの中央値を割り振って用いる(各変数の記述統計量は付表5参照)。

表4 「人の役に立つこと」を「とても重要」とみなすことの規定要因  
(二項ロジスティック回帰分析)

変数		B	Exp(B)
性別	(女子ダミー)	0.514	1.672*
所得	(15段階スケール)	0.000	1.000
保護者の価値観	(「人の役に立つことはとても重要」ダミー)	0.828	2.288***
進路	(進学ダミー)	0.323	1.382
N		385	
-2対数尤度		475.237	
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.050	
Nagelkerke R		0.069	
有意確率		0.001	

(注) \*\*\* p<0.001, \*\* p<0.01, \* p<0.05

表4の分析結果より、次の2点が明らかになった。第1に、所得と進路は、高卒者が人の役に立つことを重視することに対する、有意な規定要因ではなかった。高卒者の7割が「人の役に立つこと」を「とても重要」と回答しているが、そこには家庭の豊かさや、進路(進学・就職)による組織的なパターンは確認されない。

第2に、性別と保護者の価値観は、高卒者が人の役に立つことを重視するか否かを強く規定している。女子は男子の1.67倍、人の役に立つことを重視する傾向がある(p<.05)。また保護者が「人の役に立つことはとても重要」と回答している高卒者は、そう回答していない高卒者

の2.29倍、人の役に立つことを重視する傾向がある(p<.001)。

したがって人の役に立つことを重視することは、家庭の豊かさや進路とは無関係に、とくに女性によって支持されている価値観といえる。またそれは、高卒者が保護者から独立して形成する価値観ではなく、保護者から受け継いでいるものということが出来る。

## 5. おわりに

### 5.1. まとめ

本稿では、高校生調査より明らかになった高校生の価値観が、高校卒業後どのように変容したのかを、高校生調査、第1次追跡調査、保護者調査、NELS第3次追跡調査を用いて検討した。分析より、高卒者は高校3年時の価値観を基本的に維持していること、また多くの部分において保護者とも価値観を共有していることがわかった。高校生、高卒者、保護者に共通する価値観の特徴として、仕事で成功することを重視する地位達成志向が希薄である一方で、親友と好きなことを楽しむことや、人の役に立つこと、結婚して幸せな家庭生活をおくることなどを重視する傾向があげられる。

高卒者の価値観には、興味深い変化やグループ間の差異もみられた。主要な3つをあげるならば第1に、仕事で成功することを重視する傾向は、高3時から高卒1年目までに全体的に低下したが、とりわけ就職者の間で顕著であった。一方、進学者の間では、よい教育を受けることを重視する傾向が強まった。その結果、就職者と進学者の間には、地位達成志向における格差が生じた。

第2に、親友と好きなことを楽しむ時間をもち、人の役に立つことは高卒者によってもっとも重視されている価値であったが、前者は進学者の間で、後者は就職者の間で、支持率が低下してきている。就職者と進学者の価値観の間に、重点分化が進行していると考えることができる。

第3に、仕事で成功することを重視する傾向は、女子でも低下し、男子との顕著な差異が生じている。一方、親友と好きなことを楽しむ時間をもち、人の役に立つことを重視する価値観は、男子よりも女子によって、よりいっそう重視されていた。

保護者の価値観には、次の2つの差異が確認された。第1に、子どもには自分よりも恵まれた条件を与えることを「とても重要」と回答した保護者は、全体で2割にとどまっているが、就職者の保護者に顕著な傾向として確認された。第2に、仕事での成功を重視する傾向は、男子の保護者に強く、親友と好きなことを楽しむことを重視する傾向は、女子の保護者に多くみられた。

日本人に特徴的な「人の役に立つこと」を重視する価値観の規定要因に関する分析からは、保護者の価値観の規定力の強さが浮き彫りになった。高卒者が人の役に立つことを重視するか否かは、所得や進路の違いではなく、保護者の価値観と性別の違いによるのである。

### 5.2. 考察

現代の若者の、地位達成志向の希薄さや自己充足的なライフスタイルは、しばしば指摘されているところである(NHK放送文化研究所、2003年)。いわゆる「フリーター」や「ニート」の問題も、若者自身の価値観や生活態度の問題として論じられることが多い。それに対して、近

年の若年労働市場の現状や若者の生活環境を踏まえた研究が蓄積されてきているが（小杉編、2002年；玄田・曲沼、2004年；本田・内藤・後藤、2006年）、本稿の貢献は、若者の価値観の計量的分析に、保護者の価値観という視点を導入した点にある。本稿より明らかになったとおり、高卒者の価値観は、保護者の価値観に強く規定されている。また高卒者と保護者の価値観には多くの共通点があり、仕事での成功をあまり重視せず、親友と好きなことを楽しむことを重視しているのは、高卒者ばかりではなく、保護者も同様である。若者は社会から遊離した、特殊な価値観の持ち主ではなく、現代社会を敏感に反映し、時には先取りする存在である。その際、保護者は、若者がもっとも継続的に関わってきた身近な他者として、価値形成に極めて強い影響力をもつ。

本稿で注目した高卒者と保護者の価値観には、「子育て」に関わる項目におけるギャップも存在した。たとえば、保護者の8割が「子どもが自立できるようにすること」を重視（「とても重要」と回答）しているのとは対照的に、「親元を離れて自立すること」を重視している高卒者は4割にとどまる。しかも、男子の自立志向は、高校時代より著しく低下している。このギャップが、先述した主に母親から構成される保護者サンプルのバイアスによるのか、親子のライフステージ（子育て期・青年期）の違いによるのか、現代の若者の経済的困難な状況によるのか、いわゆる「パラサイト」的な依存性の高まりによるのかは、今後より詳細な分析を進めていく必要がある。

最後に、親友と好きなことを楽しむ時間をもつことに次いで、多くの高校生・高卒者（7割）と保護者（5割）によって重視されている「人の役に立つこと」について、若干の考察を加えて本稿を締めくくりたい。“Helping other people in my community”を重視するアメリカの高校生が3割にとどまるなかで、日本の高校生・高卒者の人の役に立つことを重視する傾向は、極めて特徴的といえるが、これまでの日本の青少年の生活や意識に関する研究で注目されることはほとんどなかった。ところが近年、活力を増してきている地域活動、NPO活動、ボランティア活動等は、まさにこうした人の役に立ちたいという草の根の価値観に支えられているのではないか。人の役に立つことを重視することは、日本社会の基盤となる重要な価値観といえるのではないか。所得や進路に関わらず広く支持されているこの価値観の形成に、いかなる要因が寄与してきたのか、地域性や社会構造、教育体験等も加味した分析を進める必要がある。同時に、人の役に立つことを重視する価値観の維持・発展にむけて、いかなる社会的環境を整備する必要があるのかについても検討していく必要がある。

#### 〔注〕

（1）本稿で注目する価値観に関する設問「次の事がらは、あなたにとってどれほど重要ですか」の項目は、付表1に示す通りである。本研究会では、高校生調査の調査票作成段階において、日米比較が可能となるように、NELS調査と共通する質問を10問設定した。NELSコーホートを若年パネル・コーホートの比較対象としたのは、両者が労働市場と教育の環境において、非常に類似した状況におかれていたためである。すなわち1990年代のアメリカは、2000年代前半の日本と同様に、長期的な不況がピーク（完全失業率：米国1992年7.3%、日本2000年5.5%）に達していた。その一方で、中等後教育機関への進学率は上昇し続け、多くの高校生にとって就職よりも進学が高卒後の進路の有力な選択肢となっていた。また教育水準の低さが経済分野における国際競争力低下の主要因であるとして、学力向上にむけた現代教育改革が協力的に推進された。

付表 1. 価値項目の一覧

若年パネル高校生調査 (問 25)、 第 1 次追跡調査 (調査票A問33、調査票B問23)、 保護者調査 (問 10)	NELS 第 2 次追跡調査 (Q40)、 第 3 次追跡調査 (Q49)
仕事で成功すること	Being successful in your line of work.
結婚して幸せな家庭生活をおくこと	Finding the right person to marry and having a happy family life.
お金持ちになること	Having lots of money.
親友をもつこと	Having strong friendships.
人の役に立つこと	Helping other people in my community.
子どもをもつこと (子どもを育てること)	Having children.
親や親せきの近くで暮らすこと	Living close to parents and relatives.
世のなかのさまざまな不平等を無くすために 社会活動をすること	Working to correct socioeconomic inequalities.
子どもには自分よりもめぐまれた条件を与える こと	Being able to give my children better opportunities than I've had
好きなことを楽しむ時間をもつこと	Having leisure time to enjoy my own interests.
親元を離れて自立すること (子どもが自立できるようにすること)	Getting away from my parents.
仕事で尊敬されること	Being an expert in my field of work.
よい教育をうけること	Getting a good education.

(2) 重み付け変数 (F4F2PNWT) を使用した後、元のサンプル・サイズに再調整した。

付表 2 日本の高校生の価値観に関する因子分析結果  
(主成分分析法、バリマックス回転)

	I	II	III	IV	共通性
	家庭重視	社会貢献	地位達成	自己充足	
結婚して幸せな家庭生活	0.825	0.066	0.181	0.076	0.724
子どもをもつ	0.822	0.170	0.121	0.021	0.720
不平等をなくす	0.066	0.794	-0.089	0.033	0.644
よい教育をうける	-0.001	0.561	0.417	0.138	0.508
人の役に立つ	0.371	0.550	-0.113	0.346	0.572
親や親せきの近くで暮らす	0.304	0.496	0.125	-0.451	0.557
子どもに恵まれた条件	0.357	0.389	0.242	0.022	0.338
お金持ちになる	0.174	-0.109	0.773	-0.011	0.641
仕事で成功	0.077	0.122	0.727	0.168	0.578
仕事で尊敬	0.083	0.442	0.490	0.332	0.553
親元を離れて自立	-0.071	0.123	0.168	0.654	0.476
好きなことを楽しむ時間	0.201	0.033	0.149	0.535	0.350
親友をもつ	0.511	0.096	-0.090	0.523	0.552
因子寄与	2.068	1.925	1.742	1.475	7.210
因子寄与率 (%)	15.9	14.8	13.4	11.3	55.5



付表 3 日本の高卒者の価値観に関する因子分析結果

(主成分分析法、バリマックス回転)

	I	II	III	IV	共通性
	地位達成	家庭重視	社会貢献	自己充足	
仕事で成功	0.800	0.060	-0.045	-0.001	0.646
お金持ちになる	0.656	0.142	-0.363	0.069	0.587
仕事で尊敬	0.635	0.058	0.271	0.311	0.576
よい教育をうける	0.585	-0.003	0.406	0.096	0.516
子どもをもつ	0.018	0.812	0.122	0.120	0.689
結婚して幸せな家庭生活	0.071	0.806	-0.170	0.235	0.738
親や親せきの近くで暮らす	0.029	0.514	0.370	-0.313	0.500
子どもに恵まれた条件	0.372	0.498	0.228	-0.011	0.438
不平等をなくす	0.075	0.035	0.796	0.030	0.642
人の役に立つ	-0.031	0.225	0.655	0.398	0.639
好きなことを楽しむ時間	-0.002	0.175	0.008	0.667	0.476
親友をもつ	0.114	0.154	0.163	0.610	0.435
親元を離れて自立	0.133	-0.137	0.026	0.574	0.366
因子寄与	1.997	1.972	1.695	1.584	7.248
因子寄与率 (%)	15.4	15.2	13.0	12.2	55.8

付表 4 高卒者と保護者の価値観〔平均値〕の差異 (t 値)

	合計	就職者	進学者	男子	女子
仕事で成功する	6.821***	-0.574	8.033***	4.281***	5.313***
お金持ちになる	8.454***	3.786***	7.603***	5.440***	6.459***
仕事で人に尊敬される	2.718**	0.477	2.746**	1.940	1.908
よい教育をうける	-0.811	-2.425*	0.067	0.869	-1.805
子どもをもつ (1)	-8.766***	-2.346*	-8.568***	-6.587***	-5.904
結婚して幸せな家庭生活	-1.095	0.151	-1.280	-1.847	-0.078
親や親せきの近くで暮らす	-0.317	-0.962	0.000	0.710	-0.973
子どもに恵まれた条件	3.164**	-0.760	3.732***	2.890**	1.665
世のなかの不平等を無くす	1.594	0.000	1.726+	2.010*	0.342
人の役に立つ	4.160***	0.753	4.187***	0.943	4.872***
好きなことを楽しむ時間	8.383***	4.097***	7.414***	6.481***	5.395***
親友をもつ	2.469*	0.597	2.467*	1.368	2.155*
親元を離れて自立する (2)	-12.644***	-3.536**	-12.275***	-8.682***	-9.186***
N	419	61	358	184	235

(1) (2) 保護者調査では、「子どもを育てる」「子どもが自立できるようにする」。\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

付表 5 二項ロジスティック回帰分析に用いた変数の記述統計量

変数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
性別 (女子ダミー)	0	1 (女子)	0.5118	0.49989
所得 (15 段階スケール)	50	2250	763.4434	416.99525
保護者の価値観	0	1 (とても重要)	0.4882	0.50040
進路 (進学ダミー)	0	1 (進学)	0.8628	0.34443

## 〔参考文献〕

- NHK 放送文化研究所編, 『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査－楽しい今と不確かな未来』NHK 出版。
- 尾嶋史章編, 2001, 『現代高校生の計量社会学－進路・生活・世代』ミネルヴァ書房。
- 玄田有史, 2004, 『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎。
- 小杉礼子編, 2002, 『自由の代償－フリーター』日本労働研究機構。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 深堀聰子, 2005, 「高校生の生活と意識－日米比較より」佐藤博樹編著『若年者の就労行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究(平成 16 年度総括研究報告書)』平成 16 - 18 年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学推進研究事業)、総括研究報告書、102 - 132 頁。
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智, 2006, 『「ニート」って言うな!』光文社新書。
- National Center for Education Statistics (NCES). 2002, *National Education Longitudinal Study: 1988-2000 Data Files and Electronic Codebook System*. Washington D. C. : U. S. Department of Education.

## 「卒業後」への連続性

——「高校生調査」時点から既に進路が変わった人たち——

鶴田 典子

本稿では、高校卒業直前からの（希望）進路に連続性があるか否かで対象者のグループ分けを行い、その違いを規定する要因の探索を第一の目的とする。進路の連続性に着目するのは、それが進学という経路をとる、とらないに関わらず、後々フリーターやニートといった不安定な就業状態へとつながりかねないと推察されるためである。

分析の際、社会階層的側面を示す変数を用いることができなかつたため妥当性に限界があるものの、結果としては、卒業直前からの（希望）進路の連続性は性別や出身高校といった属性的要因ではなく、本人のパーソナリティといった内面的な要因が中心であり、しかもそれは卒業後さらにナイーブな面を強くしていることが明らかになった。浮かび上がってきたのは「自分に自信がなく、かつ自分の考えをうまく伝えることができないナイーブで不器用な人物」像である。そういった面を考慮した若年者の就業支援の継続が今後必要だと思われる。

### 1. はじめに

#### 1.1 高校卒業時点とは

高校全入といわれるようになって久しい。高校の種類はいろいろあれど、中学卒業後ほとんどの生徒がいずれかの高校に進学する。また大学に関しても、最近では卒業後に大学院や専門学校に進学する学生が増加しているとはいえ、卒業後の進路の主流は就職である。

では、高校についてはどうだろうか。少子化とあいまって大学入学が容易化し進学率が上昇、Fランクなどと呼ばれる大学まで出てきてはいるが、一方で就職していく生徒もまだまだ存在する。進学先も専門学校、短大、四年制大学、職業訓練校など、バラエティに富んでいる。高校卒業というタイミングからその次へのステップは、そのほかの節目に比べて、個々人による違いが大きいといえる。

ここで、いまさらではあるが一応上記について、文部科学省「学校基本調査」より具体的数値をもって確認しておきたい。今回の高校生調査の対象となった2003（平成15）年度高校卒業生は、2000（平成12）年度に中学校を卒業しているが、そのときの高校進学率は96.9%であった。また、2005（平成17）年度の大学・短大卒業者のうち就職したのはそれぞれ59.7%、65.0%と6割前後に達する<sup>(1)</sup>。これに対し、2003年度高校卒業生の進路は、大学等（短大を含む）44.6%、専修学校（専門課程）18.9%、就職者16.4%である。この結果からも、高校卒業時まで当該コーホートのほとんどみなに等しく貼られていた「生徒」というラベルが、卒業を期に「社会人」、「大学生」、「専門学校生」、「浪人」、「フリーター」など、人によって異なるものに、しかも一斉に変わる最初で（かつおそらく最後の）タイミングであることが分かる。

#### 1.2 円滑ではない卒業後への移行

このような、各人がそれぞれの道をゆく「高校卒業後」であるが、そこへの移行過程が必ずしも円滑とは限らないことは周知の事実となっており、その点について既に多くの研究が蓄積されている。

まずは実態を確認しよう。厚生労働省『新規学校卒業者の就職離職状況調査』によると、高校卒業後1年以内に離職する人の割合はここ数年一貫して25%前後で推移している。すなわち4人に1人は最初の1年間で勤めあげることのないまま仕事から離れているのである。また専門学校進学者については、少し古いデータになるが、『平成9年度専修学校に関する実態調査』によると、専修学校専門課程に在籍する18歳の生徒数は175,533人であり、平成8年度中に中途退学した1年生は32,050人である。いずれも高校卒業後1年目の人のみとは限らないものの、目安として、後者に占める前者の比率を計算すると18.3%と決して低くはない。加えて、上掲書によると専修学校を中途退学する場合、1年次が圧倒的に多い(72.5%)。専門学校の中退者は決して少なくはなく、それも入学後1年以内に集中しているといっていよう。

このような卒業後への移行の問題について、就職という観点からは、小杉(2005)において、フリーターやニートといった非正規雇用者や無業者になったケースを紹介する中で、日本のこれまでの高卒就職システム、すなわち「学校の組織的な支援の下に、卒業するかなり以前から求職活動をし、卒業と同時に安定した正規の職を得る」仕組みに乗らない、あるいは乗り遅れたことや、卒業後いったんは就業しても早い段階で離職してしまったこと、仕組みに乗って就職活動をして採用が決まらないほどに悪い求人状況などがその背景にあると指摘し、さらにひとたびニート状態になってしまうと、そこから抜け出す確率は、学歴が低いほど難しくなることを示唆している。上掲書では主に中卒者(≒高校中退者)のニート者数の多さとその人数が時間が経過した後も減少しない点に着目しているが、同書に掲載されている就業構造基本調査の集計結果を見る限りでは、高卒者についても同じことが言えそうである。

また同じく小杉(前掲書, 2005)は、「いったん学校を離れると、仕事選びや就職活動のあれこれを教えてくれたり、相談に乗ってくれる場は少ない。経験も知識もまだ少ない若者たちの中には、一人で行き詰ってしまうケースも少なくないと推測される」と、学校から離れることによって生じ得る問題点も指摘している。

進学先の選択という点については、尾嶋(2001)がアンケート調査に基づいて進学動機の構造を反映する「職業重視型」、「勉学・学生生活型」、「モラトリアム型」、「進学圧力型」という4つのクラスターを構成し、それを軸に分析を行っている。それによると、大学、短大、専修学校といった学校のタイプによってそれぞれの学校への進学を希望する生徒たちの動機の分布が異なる様相を呈していることが分かる。希望する進学先によって動機が異なるということは、進学の目的や進学先に期待していることが違うということであろう。ここから、卒業間際の大学や短大、専門学校といったレベルでの希望に沿わない進学先の変更は、仮にそれで無事決まったとしても、必ずしも本人の意向に沿った幸せな帰結であるとは限らず、場合によっては中途退学などを誘発する可能性もなきにしもあらずといえるのではないだろうか。

### 1.3 分析の視点と使用データ

#### 1.3.1 分析の視点

上記のような実態や既存研究による知見を踏まえ、本稿では当研究会で実施した「高校生調査」と「第1次追跡調査」を用いて、2調査時点間における進路の動きを明らかにすることを試みる。したがって、ここでいう進路の動きには高校卒業直前の進路変更の有無と卒業後の各進路への定着状況の両方を含んでいる。通常の「卒業後への移行」という言葉の意味するところとは異なってくるため、本稿で扱う進路の動きは、以下「高校卒業直前からの(希望)進路

の連続性」と呼ぶことにする。

敢えて把握を試みる動きの起点を卒業時ではなく卒業直前の調査時点とするのは、その方が回答者の意思・意向を最もよく反映していると思われるという方法上の都合に加え、就職にしろ進学にしろ、卒業直前の時期にその方向が変更するということは卒業後の進路の不安定化につながりかねないと仮定しているからであり<sup>(2)</sup>、また直前の変更と卒業後の定着状況をひとくくりにして扱うのは、卒業直前の時期から卒業後の数ヶ月の間、進路に揺らぎがなく安定して定着している者と対照をなす存在という意味では一緒だと考えるからである。

このため、分析の軸となる変数は「高校生調査」でたずねている調査時点での予定進路（問3）から第1次追跡調査時点までの間に（希望）進路に変更があるか否かを表すものとなる。

### 1.3.2 使用データ

使用したのは2004年1月～3月実施の「高校生調査」、「学校調査」及び2004年10月実施の「第1次追跡調査」のA票（高校卒業後、職業についてたことのある方用）およびB票（高校卒業後、職業についてたことのない方用）である。

A票とB票は一部を除き異なる設問からなる別個の調査票であるが、A票では問1、問2、付問2-1、問4(a)、問7、問13に基づき、B票では問1、問6に基づき、高校生調査の問3から（希望）進路に変更があるかないかを精査し、変更がある場合を1とする変数を作成した<sup>(3)</sup>。その上で、A票とB票を一緒に集計できるようデータレコードの結合を行った。結果、集計可能なケースは最大477ケースとなった。

## 2. 対象者の基本属性

### 2.1 サンプルの概要

まずは1.3.2で作成した変数（以下、「高校からの一貫性変数」）の分布を見てみよう。表1をみると、約1割の人が高校生調査以降、（希望）進路になんらかの動き・変更のあったことがわかる。

表1 高校生調査時点からの進路変更有無

	N	%
変更なし	427	89.5
変更あり	50	10.5
合計	477	100.0

さらに、変数の中身についてより具体的に見てみよう。表2は高校からの一貫性変数が0、すなわち高校生調査の時点から高校卒業後にかけて希望し辿った進路に変更のない者の分布である。これによると、四年制大学を希望し続けている者と希望通り四年制大学に進学した者が最も多く58.8%と過半数を占めている。

一方、（希望）進路の動きに変更があったケースについて見ると（表3）、最も多いのが「調査時点の希望とは違う学校に在籍しているケース」で13名がこのタイプにあてはまった。この13名は全員が高校生調査時点では進学先は決定しておらず、かつ卒業後は四大を希望していた者は短大や専門学校へ、短大を希望していた者は専門学校へ進学している。女子で四大と短大を併願していたものであれば、「四大が第一希望→結果は短大進学」という動きも特段珍しい

くもないかもしれないが、「四大が第一希望→結果は専門学校」の場合は学校のタイプが異なることもあり、違和感を禁じえない。このほか、進学を希望していた、あるいは進学先が決定していたが卒業後は就業しているケース（5+4=9 ケース）、希望通り進学するも既に中途退学して就業しているケース（4 ケース）など、「在学中は進学→卒業後は就職に変更」というタイプも多い。また卒業直前の土壇場で、フリーターから正社員として就職したケースも見られたことを指摘しておく。

表 2 高校からの一貫性変数=0 の内訳

高校生調査問 3	第 1 次追跡調査回答	N	%
就職内定あり／未内定	→ 初職継続	44	10.3
専門学校決定／未決定	→ 専門学校在学中	95	22.2
短大決定／未決定	→ 短大在学中	35	8.2
四大決定／未決定	→ 四大在学中／浪人	251	58.8
その他（勉強・バイト）	→ 浪人	1	0.2
フリーター	→ 卒業後すぐに非正社員として仕事に就いた（初職継続）	1	0.2
合計		427	100.0

表 3 高校からの一貫性変数=1 の内訳

変更ありについて	N
調査時点の希望とは違う学校に在籍しているケース (例：短大未決定→専門学校在学中、四大未決定→短大在学中、四大未決定→専門学校在学中、その他（留学）→短大在学中、など)	13
決まっていた進学先とは違う学校に進学（浪人含む）しているケース (例：専門学校決定→短大在学中、専門学校決定→浪人（学校には通っていない=決まっていた専門学校に行かなかった）、四大決定→専門学校在学中、など)	5
進学を希望していたのに就業へと進路を変更したケース (例：専門学校未決定→卒業後すぐに正社員として仕事に就いた→辞めた→再就職（非正社員）、四大未決定→卒業後すぐに非正社員として仕事に就いた（初職継続）、四大未決定→学校に行っていない→仕事を探している、など)	5
進学先が決定していたにも関わらず卒業後就業しているケース (例：専門学校決定 卒業後すぐに正社員として仕事に就いた（初職継続）、専門学校決定→専門学校へ進学→辞めた→仕事を探している、など)	4
正社員としての就職を希望していたのに叶わなかったケース (例：就職未内定→卒業後すぐに非正社員として仕事に就いた（初職継続）、就職未内定→卒業後すぐに非正社員として仕事に就いた→辞めた→就職していない)	4
フリーター（全く未定を含む）のつもりだったのが卒業後正社員または自営業主として就業しているケース	4
希望通りの学校に進学するも辞めて就業しているケース (例：専門学校決定→卒業後専門学校に通っていた→（辞めて）就職（雇用形態不明）、四大未決定→卒業後四大に通っていた→（辞めて）非正社員として就職（継続）、など)	4
専門・短大を希望していたが卒業後浪人しているケース	3
内定があったものの離職したケース (例：就職内定あり→卒業後すぐに正社員として仕事に就いた→辞めた→再就職（非正社員）、就職内定あり→卒業後すぐに正社員として仕事に就いた→辞めた→再就職（家族従業者）、など)	3
就職から進学へ希望を変更したケース (例：就職未内定→職業訓練校へ進学→辞めた→仕事を探している)	1
その他 (例：短大未決定→学校に行っていない（通信大学とフリーター）、など)	4

## 2.2 クロス集計等による分析

次に、高校からの一貫性変数を軸に、クロス集計や平均値の比較を行う。

まず性別や出身学科、出身高校の所在地などの属性についてクロス集計を行ったが（表 4）、「変更あり／変更なし」による有意な分布の違いは見られなかった。したがって、高校卒業直前からの（希望）進路の連続性と個人の属性との間には関連性がないと推測される。次に、高校生調査時点での予定進路とクロス集計を行ったところ、こちらは関連のあることが確認された（ $p=0.000$ ）。これは集計表を見ると一目瞭然であるが、変更なしの者に比べ変更ありの者は四大を除く主な進路（就職、専門学校、短大）で未決定者の比率が高い。このことは、早い時点で進路が決まっている者の方が卒業後もそれぞれの選びとった進路に定着する傾向があることを示唆している。早い段階で決まっていると定着するということは、それだけ前もって進路について考え、納得できているということではないだろうか。

表 4 高校からの一貫性有無別性別、出身学科、出身校の所在地、高校生調査時の予定進路

		高校卒業直前からの（希望）進路の連続性（高校からの一貫性変数）								高校卒業直前からの（希望）進路の連続性（高校からの一貫性変数）					
		変更なし		変更あり		合計				変更なし		変更あり		合計	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
性別	男	187	43.8	18	36.0	205	43.0	高校生調査時点での予定進路	正社員 内定あり	42	9.8	3	6.0	45	9.4
	女	240	56.2	32	64.0	272	57.0		正社員 未内定	2	0.5	5	10.0	7	1.5
	合計	427	100.0	50	100.0	477	100.0		専門 ：進学先決定	81	19.0	6	12.0	87	18.2
出身学科	普通科	330	77.3	40	80.0	370	77.6		専門 ：進学先未決定	9	2.1	5	10.0	14	2.9
	商業系学科	31	7.3	3	6.0	34	7.1		短大 ：進学先決定	29	6.8	2	4.0	31	6.5
	工業系学科	26	6.1	6	12.0	32	6.7		短大 ：進学先未決定	4	0.9	4	8.0	8	1.7
	総合学科	25	5.9	1	2.0	26	5.5		四大 ：進学先決定	129	30.2	2	4.0	131	27.5
	その他の 学科	15	3.5			15	3.1		四大 ：進学先未決定	116	27.2	14	28.0	130	27.3
	合計	427	100.0	50	100.0	477	100.0		フリーター	1	0.2	3	6.0	4	0.8
	出身高校の 所在地	秋田県	79	18.5	10	20.0	89		18.7	その他	1	0.2	4	8.0	5
宮城県		109	25.5	18	36.0	127	26.6		卒業後まったく 未定			2	4.0	2	0.4
石川県		165	38.6	17	34.0	182	38.2		進学希望：詳細 不明	13	3.0			13	2.7
神奈川県		74	17.3	5	10.0	79	16.6		合計	427	100.0	50	100.0	477	100.0
合計		427	100.0	50	100.0	477	100.0								

出身校の大学進学率<sup>(4)</sup>や創立年といった数値データについても、それぞれのグループの平均値を算出して比較してみたが、有意な関係は確認されなかった（表 5）。高校卒業直前からの（希望）進路の連続性と属性の間にはやはり関連がないように見える。

表 5 高校からの一貫性有無別出身校の大学進学率と創立年の平均

		出身校の大学進学率 (学科別)		出身校の創立年	
続性 (高校からの一貫性変数)	高校卒業直前からの(希望)進路の連続性	変更なし	平均値	0.550	1936
			度数	406	427
			標準偏差	0.261	33
	変更あり	平均値	0.521	1929	
		度数	48	50	
		標準偏差	0.271	32	
	合計	平均値	0.547	1935	
		度数	454	477	
		標準偏差	0.262	33	
	有意確率	0.463	0.131		

最後に、高校在学中の希望進路の変更パターン別に、高校卒業直前からの(希望)進路の連続性の有無を見てみよう(表6)。希望進路変更パターンとは、在学中の5時点における希望進路の変遷をパターン化したものである。大きくは希望進路が1回も変化しなかった(希望)一貫型と、1回以上変更している模索型の2タイプに分けられる。模索型についてはその特徴ごとに早期変更型(高校2年生以降一貫)、迷走型(2回以上変更あり)、直前変更型(高校3年の夏以降に初めて変更)、その他の4類型に分けることもある。

結論から言うと、高校からの一貫性変数と高校在学中の希望進路変更パターンの間には有意な関係性が認められる(2類型、5類型ともに $p=0.000$ )。すなわち、在学中に希望進路に動きや迷いのない者は卒業直前以降も進路に動きはなく、反対に在学中に希望進路に動きや迷いがあった者は卒業直前から卒業後にわたって(希望)進路を変える傾向が見られるのである。迷う者は在学中も、卒業直前も、卒業後も迷い続け、(希望)進路を変え続けているのかもしれない。

表 6 高校からの一貫性有無別高校在学中の希望進路変更パターン(類型化)

			高校卒業直前からの(希望)進路の連続性 (高校からの一貫性変数)					
			変更なし		変更あり		合計	
			N	%	N	%	N	%
(希望)一貫型/ 模索型 (2類型)	一貫型	一貫型	210	50.4	10	20.8	220	47.3
	模索型	模索型	207	49.6	38	79.2	245	52.7
		合計	417	100.0	48	100.0	465	100.0
(希望)一貫型/ 模索型詳細 (5類型)		一貫型	210	50.4	10	20.8	220	47.3
		早期変更型	51	12.2	3	6.3	54	11.6
		迷走型	103	24.7	24	50.0	127	27.3
		直前変更型	14	3.4	6	12.5	20	4.3
		その他	39	9.4	5	10.4	44	9.5
	合計	417	100.0	48	100.0	465	100.0	



### 3. 二項ロジット回帰による分析

前節ではクロス集計や平均の比較により、高校からの一貫性変数の特徴を探ってきたが、結果は「属性は進路の動きに影響しない」ということであった。しかしながら本当にそうなのだろうか。そこで本節では二項ロジット回帰による分析を試みる。

モデルについては、拙稿（2005）で「希望進路を秋に変えたか否か」を分析する際に使用したものを基本とした。

#### 3.1 変数の詳細

使用する変数の詳細をまとめたのが表7である<sup>(5)</sup>。

表7 使用変数一覧

従属変数		変更なし=0、変更あり=1
高校からの一貫性変数		
独立変数		
a	性別ダミー（本人属性）	男性（参照カテゴリ：女性） 高校生調査より
b	学科ダミー（本人属性）	普通科、商業系学科、工業系学科、総合学科 （参照カテゴリ：その他の学科） 高校生調査より
c	県ダミー（本人属性）	秋田県、宮城県、石川県（参照カテゴリ：神奈川県） 高校生調査より
d	大学進学率（学校属性）	学科別の大学・短大進学率（0%～100%） 学校調査より
e	高校創立年（学校属性）	（年（西暦）） 学校調査より
f-1	自己評価の高さ（本人要素）	高校生調査より算出 問24. 「次のような事からは、あなたにどれほどあてはまりますか」のうち B. 私には人並みの能力がある C. 全体として、自分に満足している D. 自分には何のとりえもないと感じる E. 決めたことは最後までやり遂げる自信がある に対する回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
f-2	依存性（本人要素）	高校生調査より算出 問24. 「次のような事からは、あなたにどれほどあてはまりますか」のうち A. 成功するためには、努力より運が重要だ F. 人生にとってチャンスと運は重要だ に対する回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
g	家族との会話の頻度（家族要素）	高校生調査より算出 問 30. 「あなたはご家族(保護者)と、次の事柄についてどれほど頻繁に話し合いますか（8事柄）」に対する回答（それぞれ3段階で回答）を足しあげて平均した値
h-1	職業指導に関する熱意（学校要素）	学校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
h-2	生徒に近い（生徒にやさしい）進路指導の程度（学校要素）	学校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
h-3	進路選択に関する生徒へのコミットメントの強さ（学校要素）	学校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
h-4	学習指導・生活指導を優先しなければならない程度（学校要素）	学校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
i	希望進路変更パターン類型化ダミー	高校生調査より算出 タイプ1：（希望）一貫型／模索型の2分類（参照カテゴリ：模索型） タイプ2：（希望）一貫型、早期変更型、迷走型、直前変更型、その他の5分類 （参照カテゴリ：その他）

なお、「i: 希望進路変更パターン類型化ダミー」は、拙稿（前掲、2005）では「希望進路変更有無」変数に類似するものであり<sup>(6)</sup>、今回は従属変数を設定する際に使用する変数ということで分析からは除外したが、今回はモデルによっては投入している。

### 3.2 分析結果

分析結果の概要は、表 8 のとおりである。モデルの違いは属性以外の変数を投入したか、「希望進路変更パターン類型化ダミー」を投入したか否か、および 2 類型と 5 類型のいずれを投入したか、である。具体的には、モデル①は属性に関する変数のみ、モデル②は属性に関する変数に加え、本人要素、家族要素、学校要素といった変数を加えたもの、モデル③はモデル②に希望進路変更パターン類型化ダミー（タイプ 1）を加えたもの、モデル④はモデル②に希望進路変更パターン類型化ダミー（タイプ 2）の方を加えたものである。

表 8 分析結果（二項ロジット回帰）

	モデル①		モデル②		モデル③		モデル④		
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	
本人属性	性別ダミー（参照：女性）	-0.326	0.351	-0.294	0.417	-0.241	0.421	-0.238	0.440
	学科ダミー（参照：その他の学科）								
	普通科	6.326	15.400	4.597	13.229	4.244	12.943	4.067	12.964
	商業系学科	5.682	15.410	4.404	13.241	4.335	12.953	4.281	12.975
	工業系学科	6.718	15.406	5.175	13.240	5.058	12.953	4.805	12.978
	総合学科	5.009	15.433	3.609	13.267	3.325	12.981	3.248	13.004
	出身校県ダミー（参照：神奈川県）								
秋田県	0.235	0.674	0.006	0.809	-0.069	0.828	-0.031	0.846	
宮城県	0.449	0.643	0.801	0.840	0.898	0.861	0.839	0.884	
石川県	0.333	0.591	0.045	0.746	0.066	0.763	0.025	0.769	
属学校	出身校大学進学率	-0.873	0.897	0.297	1.361	1.351	1.427	1.573	1.439
	出身校創立年	-0.009	0.006	-0.005	0.007	-0.005	0.007	-0.004	0.008
要素本人	自己評価の高さ			-0.857	0.341 **	-0.804	0.351 **	-0.681	0.354 *
	依存性			0.650	0.345 *	0.689	0.351 **	0.724	0.357 **
要素家族	家族との会話の頻度			1.099	0.503 **	1.200	0.504 **	1.098	0.506 **
学校要素	職業指導に対する熱意			0.243	0.372	0.214	0.380	0.278	0.387
	生徒に近い（生徒にやさしい）進路指導の程度			1.406	0.714 **	1.445	0.737 **	1.390	0.755 *
	進路選択に関する生徒へのコミットメントの強さ			-0.112	0.356	-0.102	0.357	-0.128	0.358
	学習指導・生活指導を優先しなければならない程度			0.221	0.490	0.094	0.498	-0.065	0.504
	希望進路変更パターン類型化ダミータイプ 1（参照：模索型）					-1.333	0.442 ***		
希望進路変更パターン類型化ダミータイプ 2（参照：その他）								***	
一貫型							-1.258	0.639 **	
早期変更型							-0.981	0.910	
迷走型							0.118	0.591	
直前変更型							1.249	0.805	
定数	8.849	18.840	-4.724	19.492	-5.845	19.561	-7.510	20.051	
N		454		373		373		373	
-2 対数尤度		292.430		225.722		215.485		209.219	
Cox & Snell R <sup>2</sup> 乗		0.030		0.073		0.099		0.114	
Nagelkerke R <sup>2</sup> 乗		0.062		0.149		0.199		0.230	

(注) \*p<0.100 \*\*p<.050 \*\*\*p<.010

なお、モデルによる変数の有意確率のぶれは小さく、またモデルの適合性を示す擬似 R<sup>2</sup> 乗値も、低水準ではあるがモデル①からモデル④にかけて段階的に上昇している。

結果を見ると、二項ロジット回帰分析を行っても性別や学科、出身校の所在地や大学進学率、出身校の創立年など属性的な要素は有意ではないことが明らかとなった。代わりに有意となったのが「家族との会話の頻度 (+)」、「自己評価の高さ (-)」、「依存性 (+)」、「生徒に近い (やさしい) 進路指導の程度 (+)」、そして「希望進路変更パターン類型化ダミー (-)」であった。

この結果から、高校卒業直前からの (希望) 進路の連続性有無は、属性などとの関連はなく、家族との会話、生徒寄りの進路指導の実施程度、在学中の希望進路の変更パターンと対象者個人のパーソナリティに依拠すると推察される。

#### 4. 高校卒業直前からの (希望) 進路の連続性とパーソナリティ

前節で、卒業後にかけて進路が動くのに属性は関係ないということが明らかになった。そこで本節では、モデル分析で有意であった要素のうち、対象者個人のパーソナリティに注目して、(希望) 進路に変更のあった人となかった人との違いを探ってみよう。

ここで使用するのは高校生調査の間 11 と問 13、第 1 次追跡調査の A 票問 32 と問 34、B 票の間 22 と問 24 である。それぞれについて、高校からの一貫性変数を軸に、クロス集計を行う。

##### 4.1 フリーターやパラサイトシングルへの共感

最初にフリーターやパラサイトシングルについてどう思うかたずねた設問 (高校生調査問 11、第 1 次追跡調査 A 票問 32、B 票問 22) への回答状況をみてみよう。

まず、高校生調査への回答についてであるが、5%水準で有意な項目は 1 つもないという結果であった。すなわち、高校在学中のフリーター観、パラサイトシングル観と高校卒業直前からの (希望) 進路の連続性の間には関連がないということである。

次に、第 1 次追跡調査への回答状況を見ると、フリーター観のうち「自分がやりたいことを探すためにはよいことだ」(p=0.015)、「高校の進路指導が不十分なせいだ」(p=0.006) の 2 項目で有意な違いが見られた。つまり高校卒業直前からの (希望) 進路に動きのあったグループとなかったグループの間で認識の違いが生じ始めたということである。

そこで、どちらのグループの認識がどの方向に変わったのかについて詳しく見てみる。フリーター・パラサイトシングル観についての設問は「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の 4 段階で聞いている。それを前者 2 つをまとめて「そう思う (肯定的)」、後者 2 つをまとめて「そう思わない (否定的)」としてくり、高校生調査から第 1 次追跡調査の間でどのように変化したのか「肯定的→肯定的」、「否定的→肯定的」、「否定的→否定的」という 4 つのパターンに再構成して集計をした。これらの結果を整理したのが表 9 である。

まずは「自分がやりたいことを探すためにはよいことだ」について見てみると、「否定的→肯定的」、「肯定的→否定的」というように見方が反転した者が高校卒業直前からの (希望) 進路の連続性にかかわらず 35%前後存在するが、進路に動きがあったグループでは「否定的→肯定的」、「肯定的→否定的」のいずれも同人数であるのに対し、進路に動きがないグループでは否定的から肯定的に移った者よりも肯定的から否定的に移った者の方が多い。すなわち「やりたいこと探し」に関しては進路に動きがない、安定して定着している者の方が否定的な見方に変

わった結果、グループ間での差が生じたのである。

「高校の進路指導が不十分なせいだ」については、見方が反転したのは高校卒業直前からの（希望）進路の連続性にかかわらず 25%とこちらも同程度だが、「やりたいこと探し」とは反対に、進路に動きがないグループでは否定的な見方に動いた者がやや多いのに対し、進路に動きがあったグループでは、ケース数は少ないものの肯定的な見方に変った者が否定的に変った者の倍の人数である。進路指導に対する意識は、卒業後、進路に動きがない者の間では肯定的に、進路に動きがあった者の間では否定的な見方に移っていった様子が見える。

表 9 高校卒業直前からの（希望）進路の連続性別フリーター観の推移と分布

N=401		B. 自分がやりたいことを探すためにはよいことだ				D. 高校の進路指導が不十分なせいだ				合計	
		とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わ ない	まったく そう思わ ない	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わ ない	まったく そう思わ ない		
変更なし	高校生調査	N	70	188	116	27	20	68	241	72	401
		%	17.5	46.9	28.9	6.7	5.0	17.0	60.1	18.0	100.0
	第1次追跡調査	N	36	190	142	33	10	65	224	102	401
		%	9.0	47.4	35.4	8.2	2.5	16.2	55.9	25.4	100.0
			肯定的 ↓ 肯定的	否定的 ↓ 肯定的	肯定的 ↓ 否定的	否定的 ↓ 否定的	肯定的 ↓ 肯定的	否定的 ↓ 肯定的	肯定的 ↓ 否定的	否定的 ↓ 否定的	
	動き	N	170	56	88	87	34	41	54	272	401
		%	42.4	14.0	21.9	21.7	8.5	10.2	13.5	67.8	100.0
変更あり	高校生調査	N	6	29	8	2	4	8	26	7	45
		%	13.3	64.4	17.8	4.4	8.9	17.8	57.8	15.6	100.0
	第1次追跡調査	N	9	26	9	1	4	12	25	4	45
		%	20.0	57.8	20.0	2.2	8.9	26.7	55.6	8.9	100.0
			肯定的 ↓ 肯定的	否定的 ↓ 肯定的	肯定的 ↓ 否定的	否定的 ↓ 否定的	肯定的 ↓ 肯定的	否定的 ↓ 肯定的	肯定的 ↓ 否定的	否定的 ↓ 否定的	
	動き	N	27	8	8	2	8	8	4	25	45
		%	60.0	17.8	17.8	4.4	17.8	17.8	8.9	55.6	100.0

#### 4.2 自己認識とものの考え方

今度は自己認識やものの考え方についてたずねた設問（高校生調査問 13、第1次追跡調査A票問 34、B票問 24）への回答状況を見てみよう（表 10）。

まず高校生調査への回答についてであるが、こちらも 5%水準で有意な差が見られた項目は 1 つもないという結果であった。高校在学中のフリーター・パラサイトシングル観同様、自己認識やものの考え方と高校卒業直前からの（希望）進路の連続性の間には関連がないといえる。それが、第1次追跡調査への回答状況を見ると、「自分の進路について悩んでいる」（ $p=0.042$ ）、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」（ $p=0.046$ ）の 2 項目で有意な違いが生じている。

次に 2 時点間の動きについて確認すると、まずそもそも「自分の進路について今でも悩んでいる」、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」いずれについても 10%水準であれ